

## 主な研究業績

種類	著書/論文/論題名	掲載誌巻号/ 発行者/学会名	発表 年月	備考/ 執筆ページ
<b>著書</b>				
単著	日本語基幹構文の研究	新典社	2018年8月	248頁
単著	日本語助詞の文法	新典社	2006年6月	302頁
単著	係助詞と係結びの本質	新典社	2003年9月	198頁
単著	係結びと係助詞 「こそ」構文の歴史と用法	大学教育出版	2003年9月	149頁
共著	場面と主体性・主観性	ひつじ書房	2019年4月	係助詞の主観性:pp.317-337
共著	歴史言語学の射程	三省堂	2018年11月	係結びの体系:pp.151-168
共著	品詞別学校文法講座 第三巻	明治書院	2015年10月	学校文法における活用と音便: pp.1-30
共著	ひつじ意味論講座4 モダリティⅡ: 事例研究	ひつじ書房	2012年6月	終助詞とモダリティ: pp.159-177
共著	西行物語 本文と総索引	笠間書院	1996年2月	391頁
<b>論文</b>				
単著	発話者は主語ではない	解釈 第66巻第11・12号	2020年12月	pp.2-5
単著	文の種類から見た『草枕』『二百十日』の写生文	文学・語学 第219号	2017年6月	pp.161-169
単著	『草枕』の「写生文」の実態	解釈 第61巻第11・12号	2015年12月	pp.20-30
単著	「が」格の原理	国語国文 第84号第8巻	2015年8月	pp.42-56
単著	「二分結合」再考-「二項結合」「二項対等結合」を論点として-	解釈 第60巻第11・12号	2014年12月	pp.2-10
単著	述語が承ける運用成分	解釈 第59巻第11・12号	2013年12月	pp.2-7
単著	疑問詞に下接する係助詞について	解釈 第58巻第11・12号	2012年12月	pp.31-40
単著	疑問文は判断文か	解釈 第57巻第11・12号	2011年12月	pp.10-18
単著	主語となる「主体」	解釈 第56巻第11・12号	2010年12月	pp.2-8
単著	題目の範囲と真の題目	熊本県立大学文学部紀要第16巻	2010年3月	pp.右53-64
単著	題目、題目語とは何か	解釈(解釈学会)第55巻第11・12号	2009年12月	pp.11-16
単著	「は」と題目	熊本県立大学文学部紀要第15巻	2009年3月	pp.右1-20
単著	「もてあそぶ」の変遷	文学・語学 第191号	2008年7月	pp.10-24
単著	現代語助動詞「た」の原理	熊本県立大学文学部紀要第14巻	2008年3月	pp.右1-15
単著	万葉集の「は」構文	国文研究(熊本県立大学)第52号	2007年3月	pp.10-19
単著	「取り立て」を考える	熊本県立大学文学部紀要第13巻	2007年2月	pp.右1-14

単著	「て」の接続機能	国文研究（熊本県立大学） 第51号	2006年3月	pp.11-21
単著	形容詞述語文の主語の立て方	熊本県立大学文学部紀要第 12巻	2006年2月	pp.右1-17
単著	「こそ」の機能と解釈のゆれ	平成十七年度 西日本国語 国文学会会報	2005年8月	pp.17-24
単著	現代語助詞の分類-関係構成機能の観点から-	熊本県立大学文学部紀要第 11巻	2005年3月	pp.右1-26
単著	並立助詞「と」と「や」の構文上の相違について	文学・語学 第181号	2005年3月	pp.42-51
単著	「しか」は係助詞か	国文研究（熊本県立大学） 第50号	2005年3月	pp.66-78
単著	文末「か」構文の意味的体系	熊本県立大学文学部紀要第 10巻第1号	2003年12月	pp.右1-20
単著	係結び論の再構築	国語国文 第72巻第5号	2003年5月	pp.33-45
単著	「は」構文の成立条件-「魚は鯛がいい」をめぐる-	熊本県立大学文学部紀要第9 巻第1号	2002年12月	pp.右1-14
単著	係助詞の体系と歴史-「か・や」構文の再検討を軸に-	国語国文 第71巻第9号	2002年9月	pp.24-35
単著	徒然草に於ける「ぞ」と「こそ」の近似性	国文研究（熊本県立大学） 第47号	2002年3月	pp.1-13
単著	「こそ」構文の形態的変遷-係結びの崩壊に及ぶ-	熊本県立大学文学部紀要第8 巻第1号	2001年12月	pp.1-19
単著	係助詞の歴史と係結びの本質	国語国文 第70巻第11号	2001年11月	pp.24-36
単著	間投助詞から「表情詞」へ-終助詞と間投助詞のカテゴリ-再編-	静岡英和女学院短期大学紀 要 第33号	2001年2月	pp.45-56
単著	「取り立て」の図形的モデル	静岡英和女学院短期大学紀 要 第32号	2000年2月	pp.33-40
単著	「二分結合」をめぐる「は・も・こそ」と「が」	静岡英和女学院短期大学紀 要 第31号	1999年2月	pp.71-79
単著	「取り立て」から見た係助詞と副助詞	成蹊国文 第31号	1998年3月	pp.46-56
単著	「限定」と「取り立て」の視座	国語国文 第67巻第3号	1998年3月	pp.42-53
単著	係助詞の構文と情報伝達	静岡英和女学院短期大学紀 要 第30号	1998年2月	pp.53-63
単著	「こそ」構文の省略形式-特に「こそ・・・連用形」形式について-	静岡英和女学院短期大学紀 要 第29号	1997年2月	pp.65-73
単著	「もこそ」考-特殊用法の成立過程-	國學院雑誌 第97巻第10号	1996年10月	pp.40-47
単著	古典語および現代語助詞「こそ」の機能-他助詞との相互承接を中心として-	成蹊国文 第29号	1996年3月	pp.25-34
単著	所謂「中立叙述」と「総記」について	文学・語学 第147号	1995年8月	pp.31-38
単著	感動表現を形成する古典語助詞「こそ」	成蹊国文 第28号	1995年3月	pp.51-60
単著	古典語「こそ」の働き-取り立ての観点から-	國學院雑誌 第94巻第6号	1993年6月	pp.30-39
単著	「は」助詞代用形としての「も」-「君もしつこいな」という表現をめぐる-	成蹊人文研究 創刊号	1993年3月	pp.24-30
単著	古典に於ける慣用語的「こそ」の働き	國學院雑誌 第93巻第11号	1992年11月	pp.22-29
単著	「だけで」文の二義性について	國學院雑誌 第93巻第7号	1992年7月	pp.17-24
単著	係結びのもたらす「強調」の性格	計量国語学 第18巻5号	1992年6月	pp.231-239
単著	「体言+だけが」文と「体言+だけは」文の差異について	文学・語学 第130号	1991年6月	pp.46-53
単著	現代語「だけ」の用法分類とその周辺	文学・語学 第123号	1989年12月	pp.71-80
単著	現代語「が」の特性	成蹊国文 第20号	1987年3月	pp.92-98

単著	呼びかけの「こそ」考	成蹊国文 第19号	1986年3月	pp.45-49
単著	現代語「こそ」の特性について	成蹊国文 第17号	1984年3月	pp.51-59
<b>学会発表</b>				
	「二分結合」再考	第46回解釈学会全国大会	2014年8月	松本市Mウィング
	学生のための防減災教育と「もやいすと」育成	第62回九州地区大学一般教育研究協議会	2013年9月	琉球大学
	学生参加型授業の検証	第61回九州地区大学一般教育研究協議会	2012年9月	大分大学
	疑問詞に下接する係助詞について	第44回解釈学会全国大会	2012年8月	北海道教育大学 釧路校
	疑問文は判断文かー「は」構文の場合ー	中日韓言語・文化研究国際 学術共同シンポジウム2011	2011年8月	西安市、陝西師 範大学
	初年次教育における「もやいすと」育成プログラムの展開	第59回九州地区大学一般教育研究協議会	2010年9月	福岡大学
	主語となる「主体」	第42回解釈学会全国大会	2010年8月	皇學館大學
	題目の範囲と真の題目	全国大学国語国文学会	2009年12月	青山学院大学
	題目、題目語とは何か	日中言語文化研究国際シン ポジウム2009	2009年8月	南京市、南京大 学
	日本語助詞「は」と題目	熊本県立大学・祥明大学校 学術フォーラム	2008年9月	韓国天安市、祥 明大学校
	訛・玩・弄の和訓、語義など	日中言語文化研究国際シン ポジウム	2006年8月	北京市、中国社 会科学院
	「こそ」の機能と解釈のゆれ	西日本国語国文学会	2004年9月	熊本学園大学
	「しか」は係助詞か	熊本・大学国語国文学会	2004年1月	熊本大学
	終助詞と間投助詞のカテゴリ再編	日本語用論学会	1998年12月	関西外国語大学
	「こそ」構文の省略形式ー特に「こそ・・・連用形」形式についてー	全国大学国語国文学会	1996年10月	新潟大学
	係助詞と副助詞ー取り立てをめぐる問題としてー	国語学会	1996年10月	愛媛大学
<b>辞典</b>				
共著	日本語大事典	朝倉書店	2014年11月	係助詞、係り結 び、副助詞
共著	日本語文法事典	大修館書店	2014年7月	コソ
共著	五十音引き 漢和辞典	講談社	1997年10月	分担執筆
<b>その他</b>				
単著	蘇峰の意思	蘇峰(徳富蘇峰の会・熊本会 報)創刊号	2021年8月	pp.11-12
単著	漱石が住んだ熊本	解釈 第67巻第7・8号	2021年8月	pp.44-45
単著	寺田寅彦の先生	総合文化誌KUMAMOTO 第34号	2021年3月	pp.96-98
単著	学問としての「文学」	文学・語学 第224号(私 の卒業論文、私の修士論 文)	2019年5月	pp.57-58
単著	平成時代と文学の行方	総合文化誌KUMAMOTO 第26号	2019年3月	pp.49-53
単著	〔書評〕熊本日日新聞社編『手記 私と熊本地震』	熊本日日新聞2018年9月9日 付朝刊	2018年9月	7面
単著	蘇峰と、漱石と、蘆花の三角形(トライアングル)	総合文化誌KUMAMOTO 第20号	2017年9月	pp.58-62

単著	〔書評〕川村大著『ラル形述語文の研究』	日本語の研究 第10巻2号	2014年4月	pp.55-61
単著	熊本洋学校の教育-ジェーンズと、蘆花と、熊本英学校-	キリスト教教育論集 第22号	2014年3月	pp.62-66
単著	学生のための防震災教育と「もやいすと」育成	第62回九州地区大学一般教育研究協議会議事録	2014年3月	pp.115-120
単著	防震災と大学の役割	安全と健康 第65巻第3号	2014年3月	pp.31-34
単著	学生参加型授業の検証	第61回九州地区大学一般教育研究協議会議事録	2013年3月	pp.134-140
単著	近代語現代語研究の動向	文学・語学 第203号(平成22年 国語国文学界の動向)	2012年7月	pp.83-86
単著	熊本での蘆花研究の現在	文彩 第8号	2012年3月	pp.1-4
単著	初年次教育における「もやいすと」育成プログラムの展開	第59回九州地区大学一般教育研究協議会議事録	2011年3月	pp.187-193
単著	「お敏君」は「愛子」か-『思出の記』のモデル-	文彩 第7号	2011年3月	pp.32-35
単著	蘆花のなかの徳富愛子 -夫が語る妻の形容-	熊本県立大学大学院文学研究科論集 第3号	2010年9月	pp.1-13
単著	(紹介)東洋英和女学院所蔵「徳富愛子」関連資料	国文研究(熊本県立大学)第55号	2010年4月	pp.52-56
単著	文学的解釈のすすめ	文彩 第6号	2010年3月	pp.7-9
単著	ケイジョシという言い方	文彩 第4号	2008年3月	pp.76-77
単著	山田孝雄『国語学史』・『国語学史要』	日本語学の読書案内(日本語学 第26巻第5号)	2007年4月	pp.78-80
単著	「強調」の働きと表現効果	文彩 第3号	2007年3月	pp.18-28
単著	大学における現状と問題点	文学・語学 第185号(創立50周年記念号)	2006年6月	pp.89-90
単著	文の分類と「は」「が」	文彩 第2号	2006年3月	pp.47-49
単著	係結びの消滅から見えてくるもの	文彩(熊本県立大学) 第1号	2005年3月	pp.33-34
共著	漱石の記憶	熊日出版	2018年12月	なぜ三四郎は熊本人でないのか:pp92-94
共著	女性・ことば・表象-ジェンダー論の地平	大阪教育出版	2017年9月	徳富蘆花の女性表象:pp.31-45
共著	蘇峰の時代	熊本日日新聞社(熊日新書)	2013年11月	第四章:蘇峰と蘆花:pp.78-101
共著	ジェーンズが遺したもの	熊本日日新聞社(熊日新書)	2012年3月	ジェーンズと徳富蘆花:pp.119-137
共著	くまもとの紫のはなし	熊本日日新聞社(熊日新書)	2011年11月	第一章:蘆花の紫、紫雲英、紫苑会の命名者、第二章:西行物語の紫、第三章:紫苑は「しをに」
共著	至宝の徳富蘆花	熊本日日新聞社(熊日新書)	2009年6月	『不如帰』の人物造型:pp.159-175

共著	学士課程教育の改革と公立大学	公立大学協会	2009年3月	教員と職員の協働関係の確立へ向けて:pp.29-31
その他	コロナ禍をどう生き抜くか！ 漱石の多面性に学ぶ(対談録)	迷羊(NPO法人くまもと漱石文化振興会会報)創刊号	2021年7月	pp.4-11
その他	移ろひの証し(短歌5首)	現代短歌新聞	2019年7月	熊本県の歌人、5面
その他	明治維新150年 漱石と蘆花の心-文学に見る日本の近代化と反近代-(講演録)	会誌(熊本県公立高等学校長会発足70周年記念号)第55号	2019年3月	pp.18-30
その他	言葉の力(講演録)	第48回中四九地区医師会看護学校協議会パンフレット	2017年8月	pp.33-37
その他	シンポジウム「文学は生きているか-断崖に立つ文学研究-」(記録)	熊本県立大学大学院文学研究科論集 第6号	2013年9月	pp.1-44
その他	教育と言葉(講演録)	くまもと国語研究紀要(県高等学校教育研究会国語部会)第45号	2011年10月	pp.5-25
その他	シンポジウム「日本語日本文学研究の未来」(記録)	熊本県立大学大学院文学研究科論集 第1号	2008年9月	pp.3-47